

インダス文明社会の成立と展開に関する一考察

—彩文土器の編年を手掛りとして—

上杉 彰紀・小茄子川 歩

A Note on the Rise and Decline of the Indus Civilization with a Focus on the Ceramic Evidence

Akinori UESUGI and Ayumu KONASUKAWA

本稿では、ハラッパー式土器およびクッリ式土器の型式学的検討を手掛りとして、インダス文明社会の成立と展開について考察する。ハラッパー式土器には数段階の顕著な様式変化があり、成立当初と後半期ではとりわけ彩文様式が大きく異なっている。そうした彩文様式の変化の背景には、インダス平原とパローチスターン高原の関係の変化があることが、インダス文明後半期を中心にパローチスターン南部で展開したクッリ式土器の検討によって示唆される。地域間の関係と交流の視点からインダス文明社会を読み解いていくことが重要である。

キーワード：ハラッパー式土器、クッリ式土器、土器変化、インダス文明社会のダイナミズム

In this paper, the authors discuss the process of rise and decline of the Indus Civilization on the basis of pottery analysis. Although the Indus Civilization has been considered a stable society with little change in its material culture, recent excavations at some important sites on the Indus valley have revealed that the society had experienced dynamic changes through time in terms of the material culture and their spatial distribution. The analysis of the Harappan ware by the authors also reveals a distinctive change of ceramic style roughly between the early and later parts of the urban phase. It seems likely, on the basis of an analysis of the Kulli ware, that this change was caused by a change of relations with regions to the west of the Indus during the last few centuries of the third millennium BCE. This paper, although preliminary, stresses the importance of studies on temporal and spatial change in material culture and on the dynamism of Indus Civilization society.

Key-words: Harappan ware, Kulli ware, ceramic change, dynamism of the Indus Civilization

はじめに

本稿ではインダス文明期の土器編年を手掛りとして、文明社会の地域空間構造の変遷について考察する。

インダス文明の遺跡の分布範囲は東西約 1600km、南北約 1750km に広がることが知られ、きわめて広範な地域空間に展開した社会として評価されてきた。しかし、この範囲がインダス文明期を通して安定したものであったのかどうか甚だ疑問である。時期ごとの遺跡分布の詳細を明らかにすることは調査・研究の現状において容易ではないが、各地での時期的な遺跡数の増減を念頭に置いた上でのインダス文明社会の理解をめざす方向性が求められる。

この目的において重要なのは、インダス文明期を特徴づける土器様式であるハラッパー式土器の編年研究である。初期の発掘調査の方法論的限界により、ハラッパー式土器の変遷が層位的に把握されることなく、「インダス文明盛期 (Mature Harappa Period)」の土器が総体としてハラ

ッパー式土器として理解されてきた。1960 年代に行なわれたアムリー (Amri) 遺跡の調査によってハラッパー式土器の起源とその変遷が層位的に提示されることになったが、その成果が必ずしもインダス文明の展開した地域全体に敷衍されることはなく、「盛期」の土器であるかどうかだけがインダス文明の編年研究の基軸とされてきた。結果として、インダス文明期の細別編年は構築されず、いずれの地域においても「盛期」であるということだけでインダス文明社会の時空間軸上での等質性が強調されることとなったのである。

しかし、1980 年代以降の調査で、各遺跡の時期区分がより明確に把握されるようになり、ハラッパー式土器にも時期的変遷が存在することが明らかとなってきた。また、そうした層位的出土資料に型式学的分析を加えることにより、変遷の具体的内容を明らかにする試みも蓄積されつつある。

本稿ではそうした研究の現状を鑑み、ハラッパー式土器の彩文にもとづいた大別編年案を提示するとともに、パローチスタン (Balochistan) 高原南部に展開したクッリ式土器 (Kulli ware) の編年的位置づけを検討し、インダス文明期の土器編年の構築を試みる。さらに、その編年案にもとづいてインダス文明社会の地域空間構造のダイナミクスについて考察する。

インダス文明の評価に関する研究抄史と本稿の目的

本節では、特にインダス文明の起源に関する諸見解についてまとめることにする。インダス文明がどのような歴史的経緯のもとに成立したのかという問題意識は、南アジアにとどまらず西南アジア世界におけるインダス文明の歴史的意義を問うことにほかならない。1920年代におけるその発見当初から、インダス文明の起源に対する考察はその年代論とともに重要な課題であった。また、ヴェーダ文献を残したアーリア人との関係も、インド・ヨーロッパ語族に起源するインド・アーリア語族の問題をめぐるインダス文明の歴史的意義と常に関連づけて論じられてきた経緯がある。ここでは諸説を大別して2つの潮流としてまとめることとする。

第一としては、すでに文明が存在していたメソポタミア地域からの一方向的な伝播という形でインダス文明を捉える立場である。代表的な例としては、R.E.M.ウィーラー (Wheeler) の「アイディアには翼がある」という言葉に代表される、すでにティグリス・ユーフラテス地域に出現していた都市という概念がインダス地域にもたらされ、西方からの影響下でインダス文明の都市が成立したという解釈 (Wheeler 1967) を挙げることができる。このような西方からの伝播を主張する方向性は、R.D.バネールジー (Banerji) や A.H.セイス (Sayce)、G.J.ガッド (Gadd) と S.スミス (Smith) らの早くも 1920年代の研究者に看取される (Banerji 1923; Sayce 1924; Gadd and Smith 1924)。ただし、モヘンジョ・ダロ (Mohenjodaro) 遺跡の発掘を指揮した J.H.マーシャル (Marshall) は、インダス文字がミケーネの絵文字と類似することを指摘する一方で、インダス文明の独自性にも注意を払っており (Marshall 1924)、当時の西方からの影響を重視する研究の中にあってはきわめて冷静な立場といえる。さらに、1950年代の S.ピグゴット (Piggott)、D.H.ゴードン (Gordon)、1960年代の G.ダニエル (Daniel) らも西方からの影響を考えた研究者である (Piggott 1950; Gordon 1958; Daniel 1968)。また伝播説ではないが、後藤健はインダス文明をメソポタミアやイラン高原との交流ネットワークの中に位置づけ、インダス流域をエラムの食糧供給地域とし、インダス文明はイラン高原からの移民によって成立したと理解する (後藤 1997、

1999)。

第二の潮流としては、西方からの伝播説に対するアンチテーゼとして提唱された南アジア起源・自律的發展説をあげることができる。例えば、M.R.ムガル (Mughal) は、文明期以前の地域諸文化がコート・ディジー文化を核として統合され、同一歩調のもとにインダス文明成立へ向かったと理解し、インダス文明の自律的展開を主張する (Mughal 1970, 1991)。また、G.L.ポセール (Possehl) は「インダス時代 (Indus Age)」という用語を使用し、無土器新石器文化から鉄器時代の文化にまでいたる南アジア全体に及ぶ文化発展の過程を、一つの文化連続の枠組みの中で捉えようとする (Possehl 1999, 2003)。ハラッパー (Harappa) 遺跡を発掘調査している J.M.ケノイヤー (Kenoyer) の見解も、論点を異にするものの自律的發展を主張する立場として位置づけられよう (Kenoyer 1998)。

インダス文明の起源を考える場合、上述した二通りの捉え方が存在する。外來說は、外部からの一方向的な影響のもとにインダス文明を理解し、内的な発展を軽視する傾向が強い。一方、自生説はインダス流域内における自律的發展を重視し、外部との交流関係を軽視する傾向にある。しかし、いずれの議論においても、提示されるインダス文明観は長期にわたり画一的な様相を呈するという静態的な理解が通底している。

他方で、インダス文明社会は、交易をはじめとする外部社会との関係性を保つことでその都市性を維持していたとする理解もある。その代表として M.トージ (Tosi) による研究を挙げることができる。テベ・ヤヒヤー (Tepe Yahya) 遺跡とシャフリ・ソフタ (Shahr-i Sokhta) 遺跡の発掘成果からイラン高原の重要性を主張し (Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973)、インダス文明をイラン高原およびメソポタミア地方との地域間交流関係のもとに捉える視点である (Tosi 1979)。こうした広域にわたる地域間交流のネットワークにインダス文明を位置づける研究は、ワールド・システム論的な考察を行なった P.コール (Kohl) らの研究とも連動する (Kohl 1987)。筆者らは氏らの研究視点をそのまま継承するわけではないが、自生説や外來說に捉われることなく、広狭さまざまなレベルでの地域間交流ネットワークの中でインダス文明を捉えてこそ、文明社会の動態的な性質は正しく理解されるものと考ええる。

上で概観した自生説や外來說に偏ったインダス文明の捉え方は、ハラッパー文化の斉一性の維持という考えを強調する。現在においてもこの考えは根強く、ハラッパー式土器をはじめとする遺物の型式学的研究は十分に深化されない状況にある。本論では、広狭に及ぶ地域間交流ネットワークの中でインダス文明を捉えるという視点に立ち、ハラッパー式土器の彩文変遷を手掛かりに、ハラッパー文化期

(インダス文明期)の地域間交流のダイナミズムについて検討することとする。

ところで、地域間交流について考察するにあたってはさまざまな資料が存在する。「交易」という視点で有効性を発揮するのは原産地が特定される資源の獲得・供給・加工・流通のプロセスの分析である。特に西アジアとの関係を考える上では、ラピスラズリを代表とする半貴石の流通は重要な研究課題である。

一方、特定の資源・器物に限定されない、より広い意味での交流という視点においては、諸々の文化要素の分布や地域間における類似・差異の検討も重要である。発見当初よりインダス文明の年代の考察においてメソポタミア出土の器物との比較が試みられてきたように、この方法論は古くからの研究視点であるが、資料が格段に増加した現在においてこそ、この研究分野の重要性が正しく認識される必要がある。

本稿では、後者の広義での交流という視点から、彩文土器に着目する。彩文の比較研究もまた古くから試みられてきた分野であるが、彩文土器が前4千年紀から前3千年紀の西南アジア世界で広く製作され、彩文様式の通時的変遷が各地で把握できる現在、空間軸と時間軸の双方から交流の様態について迫ることが可能である。また、地域編年を構築する上でも彩文土器がもつ重要性は大きい。

彩文要素の選択から彩文構成の決定、さらにはその描出にいたる一連のプロセスにどのような社会・文化的主体が関わっていたのか現在知ることはほぼ不可能であるが、特定の地域や特定の時間幅に限定される彩文要素・構成が存在することを認識するとき、時空間軸上における人と人、集団と集団、さらには地域社会間におけるさまざまなレベルでの交流の様態が含意されている可能性を軽視することはできない。

こういった視点から、近年研究が進捗しつつあるハラッパー式土器の変遷・編年をもとに、時空間軸上におけるインダス文明社会の成立と展開について仮説的展望を提示しておくことは今後の研究の方向性を見定める上で不可欠である。さらに先ハラッパー文化期の彩文土器群やハラッパー式土器に併行して展開する非ハラッパー式土器群の動向とハラッパー式土器の関係を把握することも重要である。本稿では、先ハラッパー文化期のうちインダス文明成立直前に位置づけられる初期ハラッパー段階の彩文土器群について概観したのち、先行研究に導かれつつハラッパー式土器の変遷について考察を加え、さらにハラッパー式土器の新しい段階に併行して展開したクッリ式土器を検討することによって、インダス文明成立期からその終末にかけての文明社会の様態について考察することとする。

ハラッパー式彩文土器の編年

1920～30年代のモヘンジョ・ダロ遺跡およびハラッパー遺跡の調査では、下層、中層、上層に大別される層序が提示されたが、出土土器に関しては製作技法、胎土、色調、焼成、彩文など詳細な記述が行なわれたものの、明確な時間的変化が読み取られることはなかった(Marshall 1931; Mackay 1938; Vats 1940)。土器の時間的変化に対する認識が十分でなかったことに起因するのであろう。

1946年に実施されたR.E.M.ウィーラーによるハラッパー遺跡の発掘調査においても、R37地区における墓群という一括性の高い資料が出土したにもかかわらず、時間的変化を念頭に置いた検討が行なわれることはなかった(Wheeler 1947)。

しかし、ハラッパー式土器の変遷に関する研究は、近年の層位学的な発掘により進展しつつある分野である。この研究には厳密な型式学的視点の導入と土器変化の詳細な把握が不可欠であることはいうまでもないが、近年のナウシャロー(Nausharo)遺跡やハラッパー遺跡の調査で、層位的に土器の変化を追うことができるようになりつつある状況においては、少なくとも層位単位での型式学的検討による変化の方向性の把握が可能である。この視点から、ナウシャロー遺跡出土の資料を検討するJ.-F.ジャリージュ(Jarrige 1994)とG.クィヴロン(Quivron 2000)の研究やチャヌフ・ダロ(Chanhudaro)遺跡の資料を中心にハラッパー式土器の彩文の型式学的変遷を考察した鎌田博子(Kamada 1990; 鎌田 2000)の研究が重要である。氏らの研究は、ハラッパー式土器の彩文変遷を根拠とした地域編年の確立を目的としたものである。本論でも、基本的に氏らの編年研究を踏襲し、ハラッパー式土器を古・中・新の3段階区分で扱う。

1. 初期ハラッパー段階の土器群の概要(図1・2、表1)

初期ハラッパー段階とは、ハラッパー文化期の前段階に位置づけられる時期を指す。1970年代初頭にM.R.ムガルが、インダス文明における都市的な様相を醸成した時期として「初期ハラッパー文化期(Early Harappan Period)」と定義づけた(Mughal 1970)。この説によれば、初期ハラッパー文化は斉一的な様相を呈するものと理解されるが、実際には地域色豊かな諸文化が相互交渉のもとに存在していたものと考えられる。以下、初期ハラッパー段階における各地域の土器様式の概略をまとめる。

筆者らの見解では、前3000～前2700年頃にかけてパローチスターン高原からインダス平原を覆うネットワークが発達する。特に平原部ではコート・ディジー式土器(Kot Diji ware)が広く展開するが、この土器はパローチスターン高原の土器伝統とは異なり、単純な黒色彩文帯を特徴

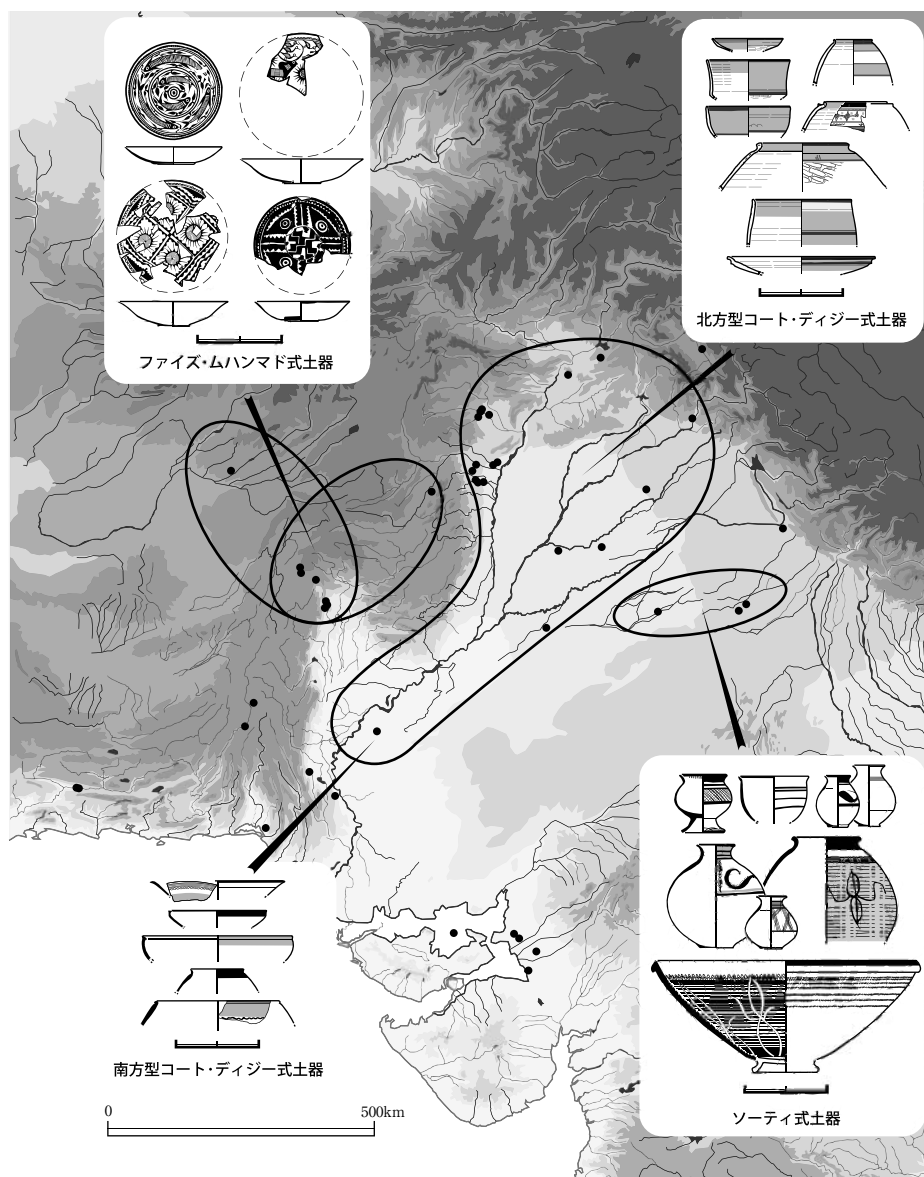


図1 初期ハラッパー段階の土器様式の地域性

とする土器様式である（以下、大様式概念として「黒色帯土器」と呼ぶ）。従来コート・ディジー式土器はインダス平原部に広く斉一性をもって分布すると理解されてきたが、実際にはゴーマル地方、パンヌー地方、ポトワール盆地、パンジャブ平原西部からなる北方地域とシンド地方を核とする南方地域で器種構成に違いがあり、大別して北方型と南方型に分けて理解するのが妥当である。ただし、北方型が分布した地域では前4千年紀後半に複雑な彩文を施すトチ・ゴーマル式土器（Tochi-Gomal ware）が展開していたことを踏まえると、初期ハラッパー段階に黒色帯土器化する現象は南北の地域性を超えて重要な歴史的意義を有していることがわかる。

また、パンジャブ平原東部ではコート・ディジー式土器と同じく黒色帯土器系統に属すると考えられるソーティ

式土器（Sothi ware）が展開する（Lal et al. 2003）。このソーティ式土器に関しては、報告資料数が限定されるために実態が判然としないところが多いが、口頸部を幅広に塗り潰す壺類が特徴的であり、少なくともソーティ式土器の一部が黒色帯土器伝統に属することは確実である。ただし、黒色帯土器系の資料の中に、胴部に変形獣角文や変形ビーパル文を大きく描く例があり、同じ黒色帯土器群に属するとしてもコート・ディジー式土器と相同ではない。また、ソーティ式土器の中には櫛描平行沈線文を施す資料があるが、この文様要素は前4千年紀のハークラー式土器（Hakra ware）に由来する可能性が高いと同時に、同じく初期ハラッパー段階の北方型コート・ディジー式土器の中にも存在する。不明の部分が多いものの、断片的にはソーティ式土器が先行するハークラー式土器の流れを汲みつ

表1 編年表

	ヘルマンド川流域		バローチスターン		シンド	パンジャープ		グジャラート
	北部	中央部	南部			西部	東部	
3000BCE	初期ハラッパー段階 前半期	ムンディガク IV-1 期	ラフマーン・テリ IIIA 期 グムラー III 期	メヘルガル VI 期	ナール II 期	コート・ディジー 第 16-8 層	ハラッパー 1 期 ジャリールプル II 期	
		ムンディガク IV-2 期		メヘルガル VIIA 期 ナウシャロー IA 期		コート・ディジー 第 7-5 層 アムリー ID 期	カーリーバンガン I 期	
	初期ハラッパー段階 後半期	ムンディガク IV-3 期	ラフマーン・テリ IIIB 期 グムラー IV 期	メヘルガル VIIC 期 ナウシャロー IC 期 ナウシャロー ID 期	ナール III 期	コート・ディジー第 4・3 層 アムリー IIA・IIB 期 チャヌフ・ダロ II 期	ハラッパー 2 期	
2500BCE	ハラッパー式土器 古段階			ナウシャロー II 期		アムリー IIIA 期 モヘンジョ・ダロ A 期	ハラッパー 3A 期	
	ハラッパー式土器 中段階			ナール IV 期	チャヌフ・ダロ II 期 モヘンジョ・ダロ B 期 アムリー IIIB 期	ハラッパー 3B 期	カーリーバンガン II 期	スールコートダー IA 期
2000BCE	ハラッパー式土器 新段階			ナウシャロー IV 期	クッリ式土器	チャヌフ・ダロ IC 期 モヘンジョ・ダロ B 期上層 アムリー IIIC 期	ハラッパー 3C 期	スールコートダー IB 期 ロータル A 期
				メヘルガル VIII 期		アムリー IIID 期 (ジュールカル期)		スールコートダー IC 期 ロータル B 期 (ジュールカル期)

つ、初期ハラッパー段階になって黒色帯土器群に包摂されるようになった経緯を想定することは可能である。

他方、バローチスターン高原ではファイズ・ムハンマド式土器 (Faiz Mohammad ware) と呼ばれる動物+植物文および幾何学文を特徴とする彩文土器が成立する。動物文においてはアフガニスタンのムンディガク (Mundigak) 遺跡と共通性をもち、幾何学文においては前 4 千年紀以来のイラン高原系の文様を特徴とする。ここでは平原部の黒色帯土器と弁別する意味で「多彩文土器系統」と呼ぶことにする。

ファイズ・ムハンマド式土器の系統は初期ハラッパー段階後半期になって弱体化する。現有資料でみる限り、より単純な幾何学文が主流となり、動物文+植物文の構成はみられなくなる。その中でこの時期のウェット・ウェア (Wet ware) は初期ハラッパー段階後半期にバローチスターン高原からインダス平原部に広く分布するようになる。また、簡略的な表現を特徴とする植物文を描いた浅鉢は、その系譜関係が不明であるものの、初期ハラッパー段階後半期のバローチスターン高原に広く分布する土器である。

バローチスターン高原南部では未明の部分が多いが、ナール式土器 (Nal ware) の系統が存続していた可能性が高い (Hargreaves 1929; Franke-Vogt 2005; Franke-Vogt and Ibrahim 2005)。ナール式土器はバローチスターン高原中央部と交渉関係をもちながらもイラン高原の系統を深く汲む土器様式で、その出現年代は前 4 千年紀後半にさか

のぼる可能性がある。その終末についても情報が大きく欠落しているが、初期ハラッパー段階後半になってバローチスターン高原中央部と類似する土器様式が成立するようである。

さらにバローチスターン高原南西部のマクラーン地方ではイラン高原南東部との関わりの強い土器群が展開する (Besenval 2005)。これは前 4 千年紀後半以来の現象であり、マクラーン地方がイラン高原南東部と深い交渉関係にあったことを物語っている。初期ハラッパー段階を通してこの交渉関係は明らかであるが、初期ハラッパー段階末になるとバローチスターン高原中央部との交渉関係を窺わせる資料がみられるようになる。詳細は不明であるが、初期ハラッパー段階末になってマクラーン地方を取り巻く交流ネットワークに変化が生じたことを示唆している。

上述の初期ハラッパー段階の各地の土器様式の特徴はあくまでも概観にすぎないが、高原部と平原部の交流関係という点から再度まとめておこう。初期ハラッパー段階の前半期には高原部の多彩文土器系統と平原部の黒色帯土器系統に大別される。両者の間で土器レベルでの相互交渉は発現しなかったが、初期ハラッパー段階後半期になると逆にシンド地方とバローチスターン高原中央部の交流が活発化する。バローチスターン高原中央部においてファイズ・ムハンマド式土器がみられなくなるのは、この平原部と高原部の交流が活発化する時期に相当しており、新たな交流ネットワークの形成が従前の土器様式に影響を及ぼした可能

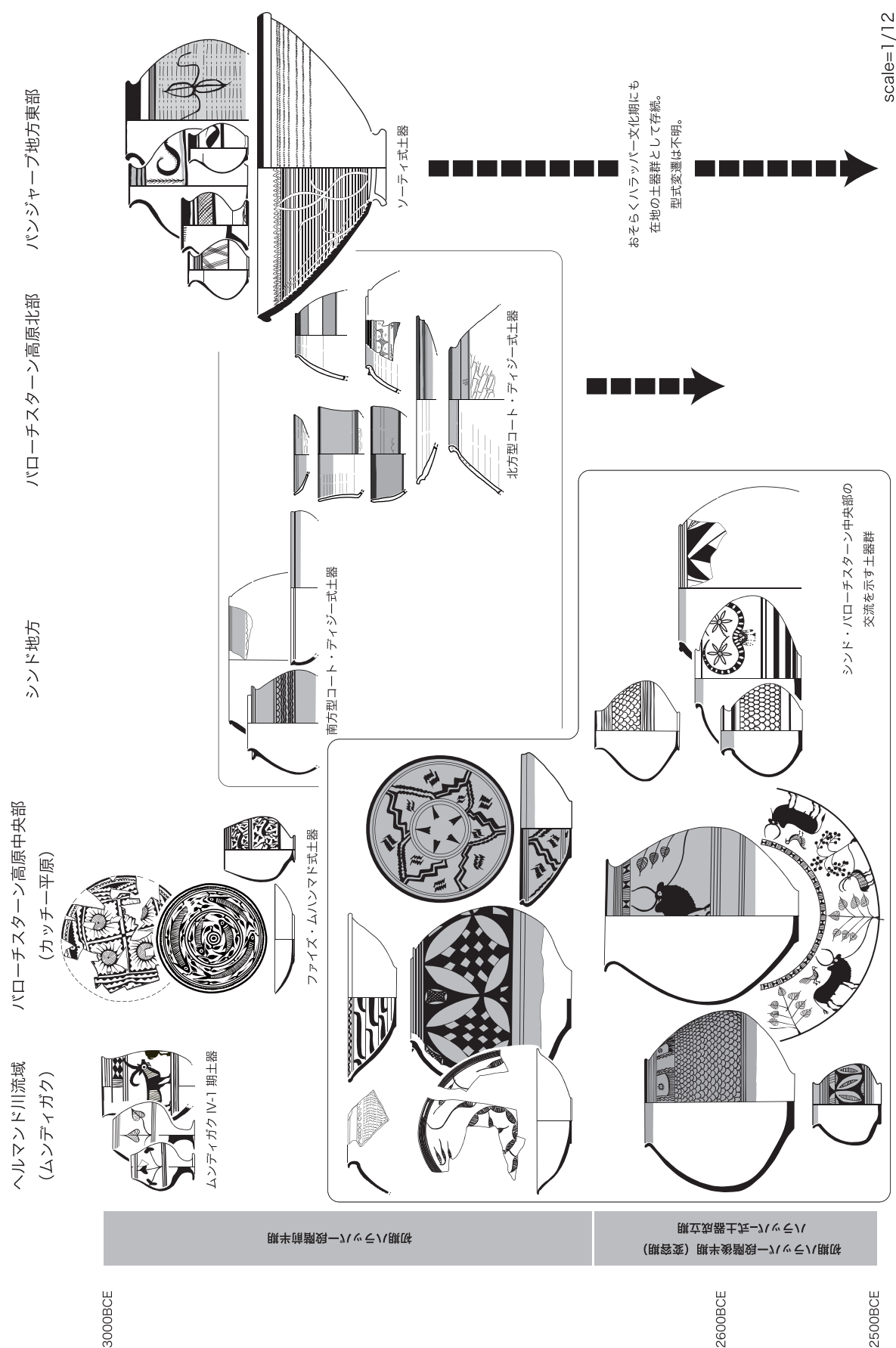


図2 初期ハラッパー段階の土器様式の変遷
(本図はあくまでも代表的な土器を図示したのみであり、土器変遷の詳細を示すことを意図したものではない。)

性を示している。また、上述のウェット・ウェアや植物文浅鉢の分布も交流ネットワークの変化に伴って生じた現象である可能性が高い。このように初期ハラッパー段階後半期は地域間交流ネットワークの変容・再編が進行する時期であり、こうした変容・再編の過程にハラッパー式土器の成立の契機が潜在していると想定できる。

2. 成立期ハラッパー式土器の特徴 (図3-1～6)

ここでは成立期ハラッパー式土器の特徴についてまとめ、その成立過程について考察する。成立期ハラッパー式土器はクィヴロンが抽出したもので (Quivron 2000)、シンド地方に所在するチャヌフ・ダロ遺跡出土資料が中心である。

チャヌフ・ダロ遺跡の出土例はマウンドII周辺で出土したもので、大形の甕に彩文例が見出される (Mackay 1943)。比較的幅の狭い文様帯を上下の圈線によって区画し、横位に展開する彩文を描く。1では縦長の本葉文(?)、太陽文、神殿文、放射状ピーパル文、扇形本葉文を描く。3では扇形本葉文、太陽文、多枝ピーパル文を配する。多枝ピーパル文の表現はムンディガク遺跡IV-1期以来の描出形式である。両者ともに文様帯の下部には魚鱗文を充填する。2では放射状ピーパル文 (あるいは水草文) と大小のクジャクを描き、その間に水草文(?) や太陽文を小さく充填する。大小のクジャクを描く構成は動物の種類は異なるもののファイズ・ムハンマド式土器の動物文の配置に共通している。文様帯の下部には太陽文を中心に置く円文が横位に並列されている。4ではクジャクに代わってヤギもしくはアンテロープと推定される動物文と放射状ピーパル文 (水草文) と太陽文を並列させる。文様帯下部に魚鱗文を充填する点は1・3と同様である。

断片的ながらこれらの資料から成立期ハラッパー式土器の特徴を把握することが可能である。後続すると考えられる古段階の例に比較して、文様帯は幅狭で、文様要素を並列させて描くという構成をとる。また、空白部分が目立つのも特徴である。文様帯以下に魚鱗文を描く点もこの時期の土器群の特徴である可能性が高い。

上述のように、大小のクジャクの配置がファイズ・ムハンマド式土器の構成に類似する点は重要である。ファイズ・ムハンマド式土器においてはコブウシあるいはヤギ (もしくはアンテロープ)、鳥、魚が主たる動物文であり、成立期ハラッパー式土器とは異なっている。しかし、配置の点ではファイズ・ムハンマド式土器の系譜上にあると考えてよいであろう。太陽文が組み合わせられる点も成立期ハラッパー式土器とファイズ・ムハンマド式土器の共通性を示している。

また、多枝ピーパル文の表現がムンディガク遺跡の例に

共通している点も重要である。ピーパル文は初期ハラッパー段階からバローチスターン高原を中心にさまざまな描出形式を採りながら描かれてきた文様要素である。その中で多枝ピーパル文はムンディガク遺跡に顕著な描出形式であり、他の遺跡での形式とは明確に異なっていることから、成立期ハラッパー式土器のピーパル文はムンディガク遺跡の系譜を引くピーパル文と考えてよいであろう。ただし、注目すべきはムンディガク遺跡の例ではピーパル文が動物文などの他の文様要素と組み合わせられることはなく、ピーパル文は単独で描かれている点である。

胴部文様帯に充填される魚鱗文に関しては、古くはハラッパー遺跡I期のラーヴィー式土器 (Ravi ware) を挙げることができるが (Kenoyer and Meadow 2000)、初期ハラッパー段階においてはコート・ディジー (Kot Diji) 遺跡第3層出土例 (Khan 1965)、アムリー (Amri) 遺跡ID・IIB期出土例 (Casal 1964)などを挙げることができる。ただし、これらの例においては、土器の器面全体に魚鱗文を充填しており、成立期ハラッパー式土器のように主文様帯に付随する形式ではない。ピーパル文同様に、文様の要素としては初期ハラッパー段階以前に出現しているものの、成立期ハラッパー式土器とは構成の点でまったく異なっていることが確認される。

初期ハラッパー段階終末からハラッパー文化期初頭に位置づけられるナウシャロー遺跡ID期では、成立期ハラッパー式土器との厳密な前後関係は判然としないものの、広口短頸壺の肩部に文様帯を区画して神殿文と太陽文を並列させ、胴部文様帯には魚鱗文を充填している。この時期にはシンド地方からバローチスターン高原中央部のカッチー平原において、肩部文様帯と胴部文様帯を区画し、胴部文様帯には魚鱗文を描く形式が誕生していたことを示している。

以上の点から、成立期ハラッパー式土器は主文様帯に関しては西方のファイズ・ムハンマド式土器やムンディガク遺跡出土土器の系譜を、胴部文様帯に関してはシンド地方の系譜を引き、両者を組み合わせて再編させるかたちで構成されていることがわかる。この複数の系譜の統合・再編がハラッパー式彩文土器の成立過程において重要である。

3. ハラッパー式土器の大別

続いて、ハラッパー式土器古段階以降の土器の特徴についてまとめる。

ハラッパー式土器古段階の資料としては、チャヌフ・ダロ遺跡、モヘンジョ・ダロ遺跡、ハラッパー遺跡、アムリー遺跡、ナウシャロー遺跡の出土資料を取り上げる。中段階の資料としてはアムリー遺跡およびナウシャロー遺跡の資料を、新段階に関してはモヘンジョ・ダロ遺跡、ハラッ

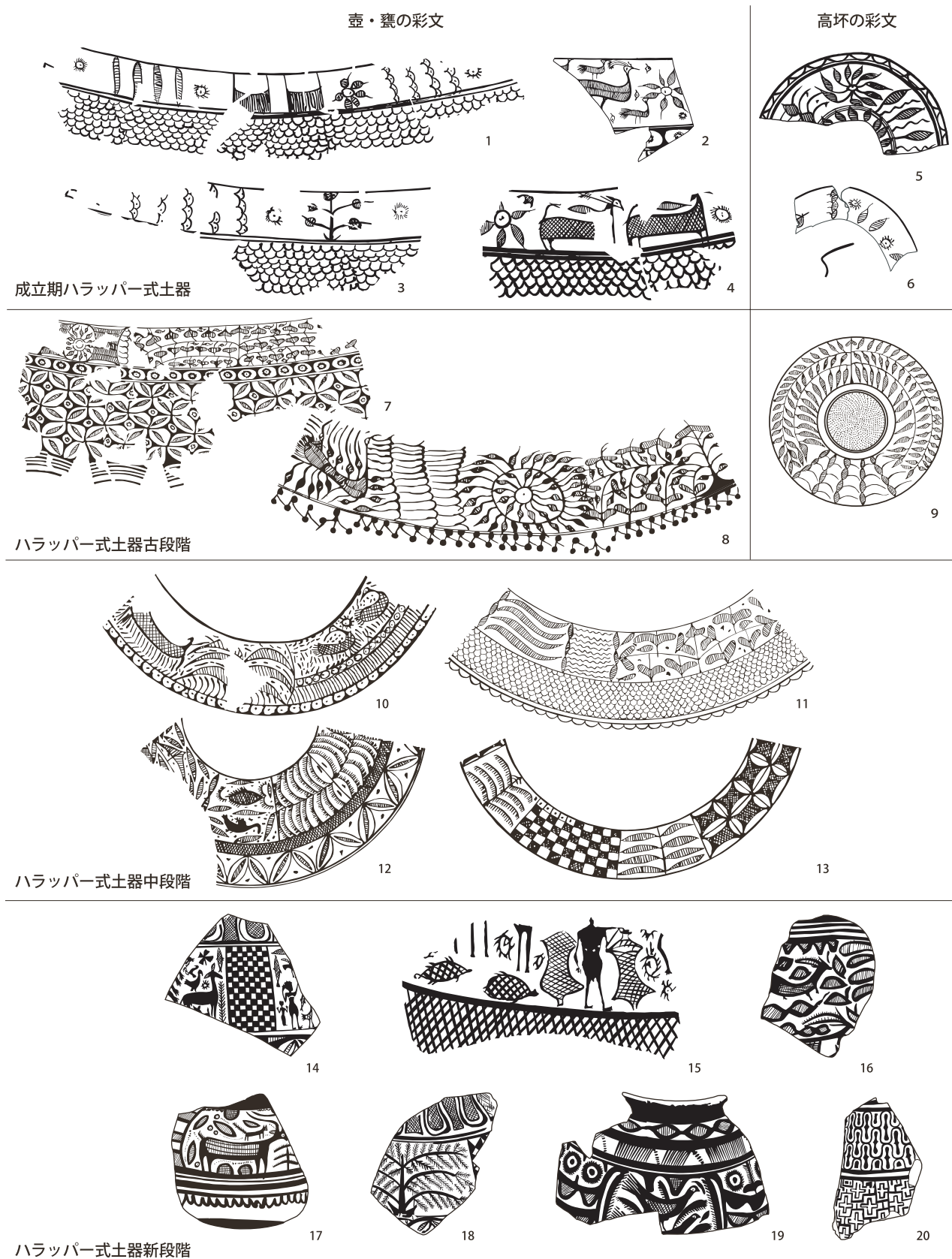


図3 ハラッパー式土器の彩文の変遷 (縮尺不同)

パー遺跡、アムリー遺跡の出土資料を検討する。

モヘンジョ・ダロ遺跡に関しては、1920年代の発掘調査の出土資料に加えて (Marshall 1931; Mackay 1938)、1964～65年にペンシルヴァニア大学附属博物館によって実施されたトレンチ調査での層位的出土資料がある (Dales and Kenoyer 1986)。出土層位と出土土器の型式学的検討によって A 期、B 期、B 期上層に細分されているが、古・中・新の 3 段階区分に対応させると A 期が古段階、B 期が中～新段階、B 期上層が新段階に相当する。

ハラッパー遺跡については 1920～30 年代の発掘資料のほかに、1986 年以降継続的に実施されているアメリカ調査隊による発掘資料が一部公表されている。この発掘調査では出土土器および遺構の検討からハラッパー文化期 (III 期) を A～C 期に細別しており、各細別時期における土器の変遷が断片的ながら提示されている。

アムリー遺跡は 1959～62 年にフランス調査隊によって発掘調査が行なわれ、I～V 期の大別文化時期区分が提示されるとともに、さらにハラッパー文化期以前に相当する I～III 期に関して、I 期が A～D 期、II 期が A・B 期、III 期が A～D 期に細別されている (Casal 1964)。報告者によれば、III 期がハラッパー文化期に相当するが、ID～IIB 期は初期ハラッパー段階終末からハラッパー文化期初頭に位置づけることができる。IIIA 期はハラッパー式土器古段階、IIIB 期は同中段階、IIIC 期は同新段階、IIID 期はジュカル式土器 (Jhukar ware) 期に相当する (Jarrige 1993)。

ナウシャロー遺跡では 1980 年代のフランス調査隊による発掘調査によって初期ハラッパー段階からハラッパー文化期にかけての文化層が確認されている (Jarrige 1988, 1990, 1993, 1994)。I 期はおおむねメヘルガル (Mehrgarh) 遺跡 VII 期に併行するが、最後の ID 期は初期ハラッパー段階終末からハラッパー文化期初頭に位置づけられる。II 期はハラッパー式土器古段階、III 期は同中段階、IV 期は同新段階併行のクッリ式土器 (Kulli ware) 期に相当する。

(1) 古段階 (図 3-7～9)

古段階についてはチャヌフ・ダロ遺跡、アムリー遺跡、ナウシャロー遺跡に良好な資料がある。大形甕、高杯、壺などの例があるが、成立期ハラッパー式土器との比較の上で重要なのは大形甕である。成立期ハラッパー式土器同様に肩部に主文様帯を設け、胴部の文様帯と区画する。主文様帯は成立期ハラッパー式土器に比較して幅広となり、器高の 1/3 程度を占める。文様要素は成立期と大きな変化はなく、クジャク、多枝ピーパル文、水草文、太陽文などを採用するが、成立期に比較して文様配置は密化する。植物文を横転させたり、ピーパルを多枝化させるなどして文様

帯内を隙間なく埋めようとする傾向が顕著である。

胴部文様帯についてはナウシャロー遺跡 II 期の例では、主文様帯の下端に連結円点文をめぐらせて胴部を無文とする大形甕と、胴部にも圏線で文様帯を設け交差円状木葉文を描く有蓋甕が公表されているが、チャヌフ・ダロ遺跡 Ia 期で報告されている大形甕はいずれも胴部文様帯に交差円状木葉文を描いている。両者の間に時間的先後関係があるのかどうか不明であるが、交差円状木葉文は古段階から中段階を特徴づける胴部文様であることは確かである。

高杯では杯部の内面に植物文を中心に描く。アムリー遺跡 IIIA 期にはクジャクや魚を描いた例があり、特に複数の魚を円環状に描く構成はファイズ・ムハンマド式土器に共通する。しかし、その描出形式は大きく異なっており、ハラッパー式土器独自の形式がある。また、同じくアムリー遺跡 IIIA 期には高杯の脚裾部にも彩文を施した例があり、植物文やクジャク文を描く。壺にもクジャク文と植物文を描いた例がアムリー遺跡 IIIA 期に存在する。

原則的に大形甕、高杯、壺で描かれる文様要素および構成は共通しており、ハラッパー式土器古段階の一貫した特徴となっている。

(2) 中段階 (図 3-10～13)

中段階の資料としてはモヘンジョ・ダロ遺跡、ハラッパー遺跡の資料のほかにアムリー遺跡 IIIB 期やナウシャロー遺跡 III 期の資料を挙げることができる。

彩文要素としては古段階からの連続性が認められるが、個々の彩文要素は変形の傾向をみせている。ナウシャロー遺跡 III 期の例でみると、ピーパル文は葉の両端が尖って、本来の丸みを帯びた形態を失うとともに、全体的に大振りになっている。文様の大振り化は水草文においても同様である。また、中心軸から左右に弧状の幹が多段に伸びヒゲ状の葉をつける植物文 (ここでは多枝イトスギ文と呼ぶ) や中心軸の左右にヒゲ状の葉を表す植物文 (ここでは単軸イトスギ文と呼ぶ) が顕著となる。

クイヴロンが検討した資料でみると、多枝イトスギ文はミリ・カラート (Miri Qalat) 遺跡 IV 期の大形甕に表現例があり (Besenval 1997)、クイヴロンはハラッパー式古段階に位置づけている。そもそもここでイトスギ文とした植物文はイラン高原南東部に特徴的な文様であるが、ミリ・カラート遺跡が所在するマクラーン地方は初期ハラッパー段階以前から同地方と交流関係を有していた。この点から考えると、ミリ・カラート遺跡例はそうしたイラン高原南東部との関係の中で多枝イトスギ文を描いたものである可能性が高い。そうしたイラン高原南東部との交流関係がインダス平原部へと伸張するのは中段階においてのことであろう。

このほか、千鳥格子文や交差円文を変形させた斜格子充填菱形文などが新たな要素として描かれるようになる。これらの幾何学文はパローチスターン高原に由来する文様である可能性がきわめて高い。また、ほかに類例はないがナウシャロー遺跡 III 期出土土器にはサソリ文を描いた資料がある。サソリ文はイラン高原系の文様であり、イトスギ文の導入に付随して嵌入したものであろう。

以上の状況は、一方で古段階の文様が形骸化し、一方でイラン高原系の文様が嵌入して、中段階の彩文を特徴づけていることを示している。両者を連動した現象とみなせば、文様の形骸化はイラン高原との関係の変化によって進行した可能性もあろう。

(3) 新段階 (図3-14～20)

この新段階の良好な資料としては、ハラッパー遺跡旧資料とモヘンジョ・ダロ遺跡旧資料、チャヌフ・ダロ遺跡の出土資料を挙げることができる。

この段階には古段階に比較すると彩文原理が著しく変容する。最も顕著な変化として認められるのは風景を意匠化した彩文の出現である。14では千鳥格子文帯の左右に風景文が描かれているが、左には四足獣と鳥、魚、単軸イトスギ文が組み合わされて描かれている。四足獣の背後にも別の四足獣の足が残っている。右側の区画には大小の人物と鳥、魚を組み合わせた表現がみられる。こういった場面を描いたものかわからないが、複数の文様要素を組み合わせ、風景意匠としていることは確かである。また、イトスギ文と四足獣の組み合わせは後述のクッリ式土器に通じる構成であることも重要である。17は14の四足獣の構成と共通しており、樹木を頭前に置く有角獣とその背後に小さく描かれるネコ科の動物からなる。周囲には簡略化された木葉文や円環文、列点文が配されている。15では網をもつ人物と魚・太陽文を組み合わせている。四足獣のものと思しき脚も一部が残っている。16は風景文とすべきかどうか問題を残すものの、複数頭の有角獣（ヤギあるいはアイベックスか）と著しく粗雑な植物文・木葉文を組み合わせている。

このほかハラッパー式土器中段階までの文様が著しく変化した例もある。19は曲線化した神殿文によって区画される文様帯にクジャク文を上下に描いている。神殿文の上部には太陽文が2個ずつ配されるが、向かって右側では太陽文の間にピーパール文と単軸イトスギ文を融合させた文様が描かれている。文様要素としては中段階以前にその祖形を求めることができるものの、文様自体の変形と構成形式の著しい変化を示す代表的資料である。

また、この段階の胴部文様帯においては従来の魚鱗文や交差円状木葉文ではなく、パローチスターン高原の初期ハ

ラッパー段階以前にみられた文様を充填する例もある(20)。長胴壺の胴部破片であるが、2段の文様帯が残っており、上段には曲線化した変形十字文を、下段には直線構成の十字文を充填している。

このように、新段階には中段階までの彩文が著しく変形したもの、クッリ式土器に共通した文様構成を採用するもの(風景文を含む)、パローチスターン高原系の文様を描くものなどが混在しており、古段階の彩文と比較すればその差異は明瞭であろう。このことは新段階にいたってハラッパー式土器の彩文構成原理を大きく変容させる歴史的事象が生じたことを物語っている。

以上の概略を通時的にまとめると、成立期においてはパローチスターン高原とシンド地方の文様要素を統合して新たな彩文様式が生み出され、それを発展させるかたちで古段階の彩文へと展開する。しかし、中段階には文様要素の変形や大振り化という内的変化とイトスギ文を代表する外来系文様の導入という外的変化が生じる。おそらくこの中段階を契機として新段階の彩文構成の著しい変化が導き出されることになったと考えられる。新段階の様相は、古段階と比較するとむしろ彩文様式全体の一新ともいえるべき変化であり、そこに含意される歴史的事象の大きさを窺うことができる。

クッリ式土器の編年の位置づけ

本章では、ひとまずハラッパー式土器から離れて、クッリ式土器について検討する。クッリ式土器の編年の位置づけおよびその歴史的意義については別稿において論じているので(近藤・上杉・小茄子川 2007)、ここではハラッパー式土器の変遷との関係に焦点を当てて論じることとした。ただし、記述の便宜上、まずクッリ式土器の特徴について概観することとする。

1. クッリ式土器の特徴 (図4)

クッリ式土器とは A. スタイン (Aurel Stein) によるパローチスターン高原南部の調査で発見された土器で、インダス文明に併行する時期の土器様式として位置づけられてきた (Stein 1931; Pigott 1950; Fairervis 1971; Possehl 1986)。近年のナウシャロー遺跡の発掘調査で、ハラッパー式土器中段階の土器よりも層位的に後出する状況でクッリ式土器が出土し、前 2200～前 2000 年という年代が与えられている (Jarrige 1994)。すなわち、少なくともナウシャロー遺跡ではクッリ式土器はハラッパー式土器新段階に併行することが確認されたのである。

スタインによるクッリ遺跡の調査では、多様な彩文土器が層位的に分離されない状況で出土しており、何をもって

クッリ式土器とするか厳密な定義はなされなかったが、ここでは、大きな丸い眼を特徴とする動物文（コブウシを中心としてヤギ・ネコ科の動物・魚・鳥など）と植物文（ビーパール文およびイトスギ文）を組み合わせる構成を基本とする彩文土器をクッリ式土器として認識することとする。もちろんほかにもクッリ式土器を特徴づける要素は存在するが、最大公約的にはその彩文構成が最も特徴的な要素である。

器種・器形の点では有肩広口短頸壺、短頸壺、高坏、鉢、広口鉢、鐔付広口短頸壺などがある。これらの器種・器形はハラッパー式土器およびイラン高原双方の器種・器形に類似しており、パローチスターン高原南部を舞台としてクッリ式土器が東西両地域と関係を有していたことが推測される。この点は次節で述べるように文様要素・文様構成においても同様である。

2. クッリ式土器の系譜とハラッパー式土器

先述のように、クッリ式土器の最大の特徴は動物と植物の組み合わせを主たる文様要素とする点である。さらに付言すると、動物は右を向き、その頭部と右側に配される植物は縄様の線で結ばれた表現となっている。この結びつけられた動物と植物を単位として反復的に文様帯全周が埋められる。動物の周りには太陽文、魚文、曲線文、神殿文、列点文が小さく配されている（図4）。

主文様要素となる相互に結びつけられた動物と植物の構成はナウシャロー遺跡 ID 期出土の大形壺にも描かれている（図5）。壺の胴部上半に大きく彩文帯を設け、コブウシ+植物を大きく描出している。動物文にはコブウシ、ヤギ、鳥が描かれている。大きな丸い眼をもたない点はクッリ式土器との大きな相違点である。また、動物の周囲に小文様要素を表現しない点も異なっている。しかし、動物+植物を主文様とする点はクッリ式土器との強い結びつきを示している。ナウシャロー遺跡 ID 期は初期ハラッパー段階終末からハラッパー式土器成立期に併行すると考えられるが、クッリ式土器をナウシャロー遺跡 IV 期の出土資料を基点としてハラッパー式土器新段階に位置づけると、ナウシャロー遺跡 ID 期とクッリ式土器の間に時間的なギャップが生じる。このギャップを埋める資料は現在のところ得られていないが、ナウシャロー遺跡 ID 期の土器とクッリ式土器の間にある文様要素・構成の差異はこのギャップとなる時間幅の中で埋められることになるのであろう。

さらにナウシャロー遺跡 ID 期の土器の祖形を探すと、メヘルガル遺跡 VI～VII 期に出土するファイズ・ムハンマド式土器が目目される。ファイズ・ムハンマド式土器においては結びつけられた動物と植物という意匠は認められないものの、コブウシや有角獣、鳥と太陽文・植物文を密

に配する構成が特徴的である。大きな丸い眼の表現はナウシャロー遺跡 ID 期の土器以上にクッリ式土器との類似性を窺わせている。また浅鉢の内面に描かれた魚文の形式はクッリ式土器にもみられる。同様の特徴をもった動物表現は、表現される動物が異なるものの、ムンディガク遺跡 IV-1 期にもある。

このように動物文+植物文という組み合わせでみると、クッリ式土器はパローチスターン高原の彩文伝統に属していることが理解できるが、それだけではなくイラン高原の彩文伝統の影響も認めることができる。クッリ式土器において副次的な幅狭彩文帯に連続的に表現されるヤギ文はイラン高原南東部を中心としてイラン高原からペルシャ湾岸に広くみられる文様要素である。また、クッリ式土器において動物に結びつけられるイトスギ文も先述の通りイラン高原に由来する文様要素である。このことからクッリ式土器の彩文はパローチスターン高原の彩文伝統を基盤としつつもイラン高原の要素も取り入れて成立したことが推測できる。

ここでハラッパー式土器との関係となるが、上に指摘したように新段階のハラッパー式土器にはクッリ式土器同様に動物+植物という構成をとる彩文土器が含まれている。文様要素の表現形式こそ異なるものの、その構成は相同のものともみなしてよいであろう。このことは新段階におけるハラッパー式土器の彩文構成の変化がクッリ式土器と連動して生じていることを示唆している。クッリ式土器の文様構成がパローチスターン高原の彩文伝統に則っていることが明らかであるので、ハラッパー式土器新段階の例はクッリ式土器からの影響と判断できる。

こうした高原部からの影響が顕在化する状況は、古段階を典型とするハラッパー式土器の文様構成の厳格な維持がなされなくなっていたことを物語っている。成立期におけるハラッパー式彩文様式の創出は、高原部と平原部の伝統を統合しようとするハラッパー文化側の意図を反映していると考えられるが、そうした社会・文化的統合を彩文に表現しようとする志向性が新段階までに低下するにいたったのであろう。中段階までの文様要素・構成が著しく変形したり、クッリ式土器やパローチスターン系彩文伝統の影響が顕在化したりするのは、ハラッパー式土器における独自の彩文構成への志向性が低下したことの裏返しとして理解することができる。

新段階におけるクッリ式彩文構成の平原部への影響は土器だけにとどまらない。インダス式印章の中にもその影響を示す資料がある（図6）。右を向き、大きな丸い眼を特徴とする動物を表現する印章例が A. パルポラ（Parpola）の集成によれば 16 点知られる（Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991）。それに 2000 年に日本で開催さ

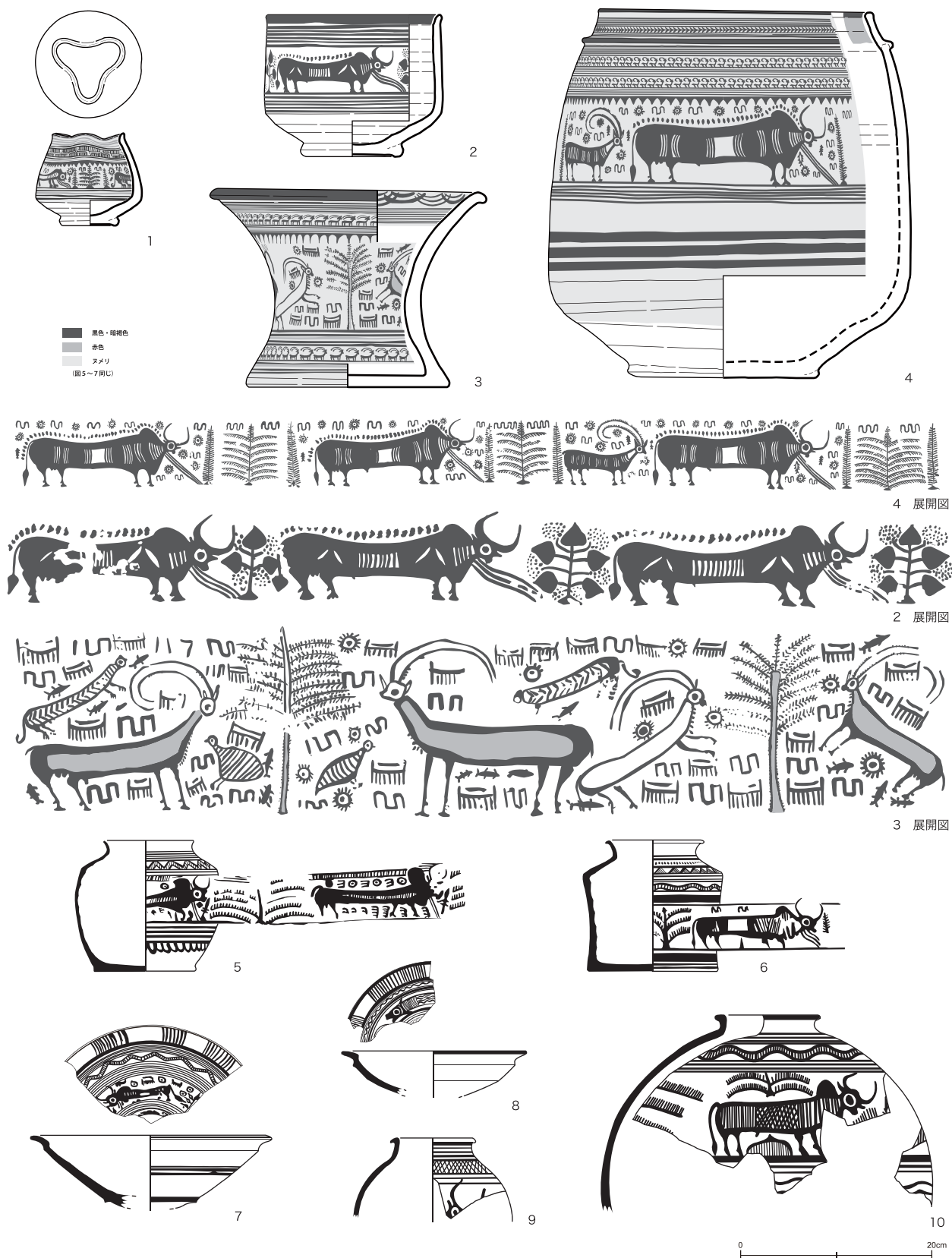


図4 クリ式土器

(1～4：岡山市立オリент美術館所蔵資料、5～8：クリ・マーヒー遺跡出土資料、
9・10：ナウシャロー遺跡出土資料)

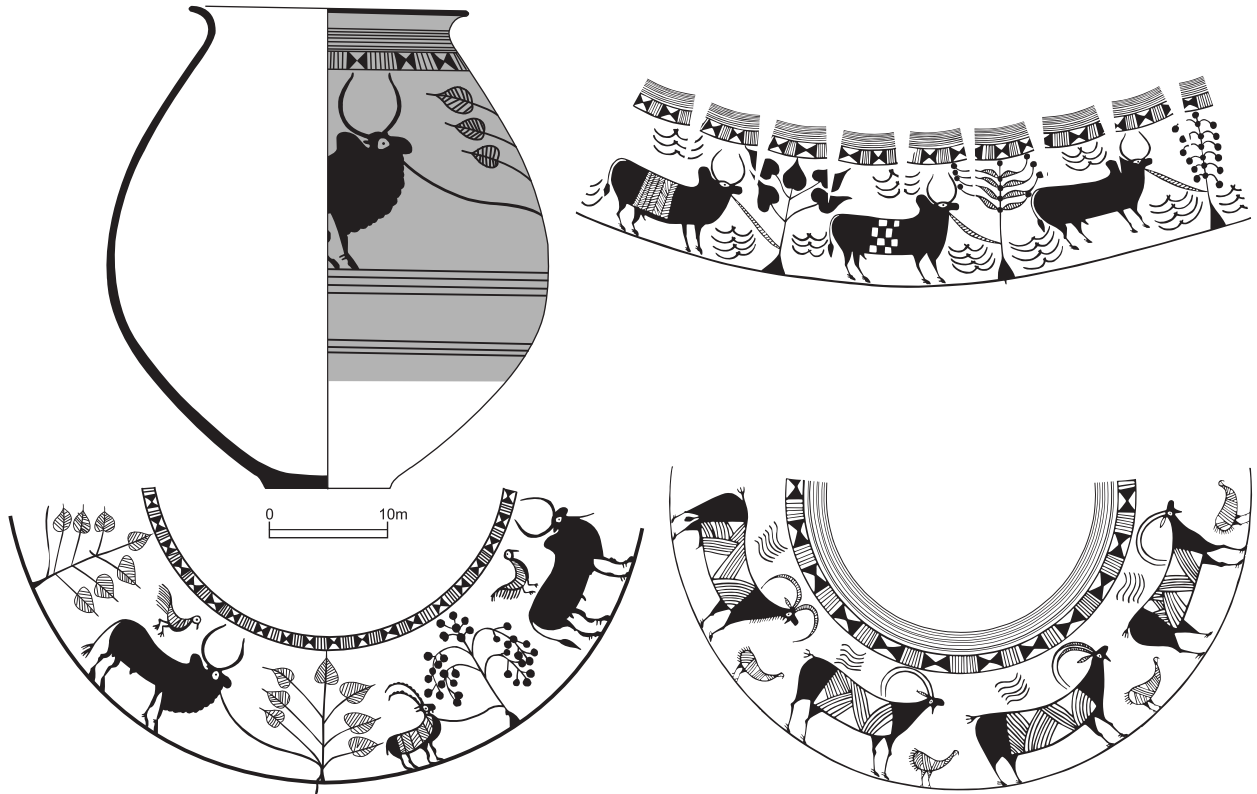


図5 ナウシャロー遺跡 ID 期出土土器（縮尺不同）

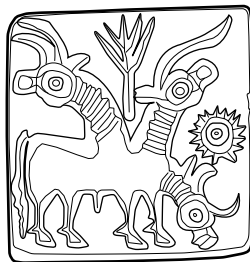


図6 クリ式土器に共通する文様構成を採る
インダス式印章
（ドーラーヴィーラー遺跡出土）

れたインダス文明展において展示されたドーラーヴィーラー（Dholavira）遺跡の3例がある（NHK・NHK プロモーション編 2000）。

インダス式印章全体からみればごく限られた数であるが、この大きな丸い眼を有する例の中には一角獣以外の動物を表現する例が15点で、中でもヤギや複頭獣が目立つ。その中でも特に注目されるのがドーラーヴィーラー遺跡出土の1点で、右向きの三頭獣の頭上に樹木、頭前に太陽文を配している。配置こそ違うものの、表現される要素はクリ式土器に共通しており、大きな丸い眼と合わせてクリ式土器からの影響を示している。これらの典型インダス式印章とは異なる一群が出土している遺跡は正式報告書が出ていないものが多く、出土層位等にもとづいて帰属時期を決定することが難しい状況にあるが、クリ式土器との

関係を認めるならばハラッパー式土器新段階に併行する時期に属する可能性が高いであろう。

このように新段階にはクリ式土器の影響が平原部において顕在化するが、パローチスターン高原南部にクリ文化が展開したことはインダス平原と西方との交流関係を考える上で重要である。というのもハラッパー式土器古段階～中段階にはパローチスターン高原南部のマ克蘭（Makran）地方までハラッパー文化が進出していたことがソトカーゲン・ドール（Sutkagen Dor）遺跡（Dales and Lipo 1992）、ソトカー・コー（Sotka Koh）遺跡（Dales and Lipo 1992）、ミリ・カラート遺跡などの例から明らかで、イラン高原南東部へと抜ける交通路をハラッパー文化集団が掌握していた可能性が高いのに対し、新段階にはこの交通路がクリ文化集団によって抑えられ、インダス平原とイラン高原南東部との直接的な交渉関係が途絶えた可能性が浮上するためである。

おおむねハラッパー式土器新段階に併行する時期に、グジャラート地方とベルシャ湾岸地方の海洋交易が活発化したと考えられるが、このことは陸路によるハラッパー文化と西方とのつながりが途絶したことに原因の一端があるのではないだろうか。翻って、クリ文化はインダス平原とイラン高原をつなぐ役割を担った移動性の高い商人集団と考えられる。その出自はパローチスターン高原において初期ハラッパー段階から活躍してきた集団であろうが、前3

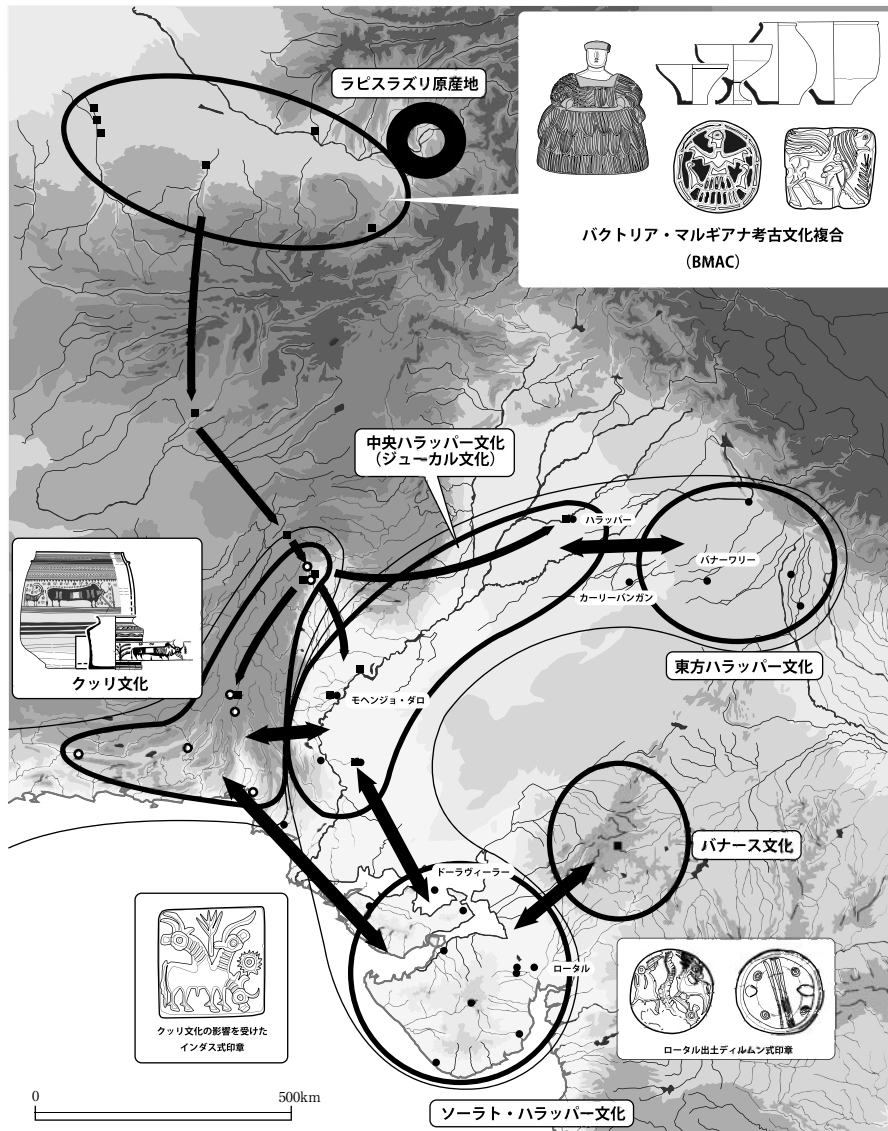


図7 インダス文明後半期の様相

千年紀後葉にいたって広域交流ネットワークの中で重要性を強め、東西をつなぐ役割を担うことになったのであろう。クッリ文化とバクトリア・マルギアナ考古文化複合 (Bactria-Margiana Archaeological Complex = 以下 BMAC) との関係もこうしたイラン高原を舞台とした広域交流ネットワークの再編に連動するものであろう。

インダス文明期における地域構造の変遷

1. ハラッパー式土器にみるインダス文明社会の展開

以上検討してきたように、ハラッパー式土器は大別して古・中・新段階でその彩文構成を大きく変化させてきた。特に新段階にはクッリ式土器の展開と連動するかたちで大きく変化を遂げることとなった。その変化とはハラッパー文化を主体とするインダス文明社会の存立基盤の変化に起因していると考えられる。

初期ハラッパー段階まではイラン高原から延伸してくる広域交流ネットワークの東端に接続するかたちで展開したパローチスターン高原およびインダス平原の地域社会が、西方とのつながりを梃子にして社会統合を進め、独自の文明社会のシステムを生み出した。独自の形式をもつインダス式印章や、依然未解読のインダス文字、そしてハラッパー式土器などのインダス文明社会のアイデンティティあるいはイデオロギーを表徴する器物や、交易・生産の円滑化を図った度量衡体系の創出などが、文明社会のシステムを特徴づけている。また、その大規模性、集住という生活空間の構成形態あるいは村落との異質性から導き出されるモニュメント性を特徴とする都市の建設も文明社会のシステムが可能としたものと考えられる。

ハラッパー式土器の編年に依拠すれば、こうした文明社会のシステムは古段階にはインダス平原を中心としてパロ

ーチスターン高原の東縁部に波及し、さらにラピスラズリ原産地のバダフシャー（Badakhshan）地方やイラン高原南東部へと通じるマクラーン地方にも拠点的に展開する。初期ハラッパー段階までは等質的な連鎖構造を基本とする交流ネットワークによって結びつけられた地域社会群を独自のイデオロギーによって統合しようとする社会的意思がインダス文明社会の成立をもたらしたと考えられ、その社会的意図は西方との交流に基盤を置くものである限りにおいてその交流の資源・ルートの確保を前提としていたと推測される。バダフシャー地方のショールトゥガイ（Shortughai）遺跡（Francfort 1989）やマクラーン地方のソトカーゲン・ドール遺跡はまさにそうしたインダス文明社会と西方との交流という文明社会の根幹に関わる遺跡であったであろう。

しかし、遅くともハラッパー式土器新段階までにはイラン高原におけるネットワークの再編に伴って、インダス文明社会は西方との交流関係の改変を迫られることとなった（図7）。クッリ文化の成立あるいは台頭はまさにそうしたイラン高原の再編に伴うものである。また、文明社会のアイデンティティ・イデオロギーを表徴する土器の彩文構成や印章にまでクッリ式土器の影響が及んだことは、西方との交流関係の改変とは交流関係の停滞であり、かつ文明社会を統合するイデオロギーの弱体化を意味するものであったことを示唆している。

このように、西方との交流関係の弱体化はインダス文明社会の地域統合をも弛緩させる結果をもたらした可能性が高い。統合された地域社会の解体は一時に生じたものではなく、一定期間に及んで徐々に進行したのであるが、シンド地方においてハラッパー式土器新段階に後続するジュールカル式土器の段階には、同地方にはほとんど遺跡が確認されなくなる。すなわち、かつて文明社会の中心地であったシンド地方が空洞化したことを物語っている。また、ジュールカル段階にはインダス式印章が消失し、イラン高原系の幾何学文印章が復活することはインダス文明システムがすでに過去のものとなり、イラン高原とインダス川流域をつなぐ交流の様態が変化したことを物語っている。

このインダス文明終末期には東方のパンジャブ地方東部やグジャラート地方に遺跡集中の中心は移転するが、この時期までには両地方ともに都市と呼べるような地域社会の拠点は失われていた可能性が高い。また、文明末期以降、各地で地域色豊かな土器群が成立することは、単にハラッパー文化の中心地が東方に移転したのではなく、むしろハラッパー文化による統合が弛緩していく中で地域文化が顕在化したことを物語っている。

西方との交流関係を梃子にして成立したインダス文明社会は、同様に西方との交流関係に起因して衰退・解体へと

向かう。都市を中心として高度な技術体系を創出し、社会統合を実現した文明社会は西南アジア世界の中で周縁化し、より小規模な地域社会群へと解体していく。文明期の技術体系は解体の過程で要素に分解されながら地域ごとに継承されていくものの、その運用目的は文明期のそれとは異なり、きわめてローカル化した性格であったと考えられる。技術要素レベルでみれば、文明期の遺産は確かに後世に継承されたであろうが、文明社会という社会システムはその姿を消すことになったのである。

2. インダス文明社会における高原と平原

インダス文明の成立にとって高原部と平原部の関係は重要な意味をもっていたと考えられる。前述の「初期ハラッパー段階の土器群の概要」でみたように、初期ハラッパー段階前半期には平原部と高原部で異なる土器伝統が発達したが、後半期になると平原部と高原部、とりわけパローチスターン高原中央部のカッチー平原とシンド地方の交流が顕在化する。厳密に言えばカッチー平原はパローチスターン高原本体ではなく高原部から平原部へと降りたところに位置しているが、歴史的にはパローチスターン高原社会の一部として展開してきた地域である。カッチー平原は高原側からみれば高原からの出口であり、平原側からみれば高原への入口である。したがって、初期ハラッパー段階後半期においてカッチー平原とシンド地方が交流関係を強めたことは、平原部と高原部がつながったことを意味している。

パローチスターン高原はイラン高原に連なっている。その大部分が平原部に比較すれば農耕に不適な土地であり、この地域では主に牧畜が発達したと考えられる。想像の域を超えるものではないが、移動性の高い牧畜民が生活を営んできた地域と想定される。前4千年紀からパローチスターン高原にイラン高原に起源する文化要素が広く分布した状況は、こうした牧畜民の遠距離移動や相互交渉、あるいは交易活動の発達によるものと推測することができる。物資の運搬や情報の伝達に彼らが果たした役割は決して小さなものではなかったであろう。

こうした牧畜民が活躍したと想定されるパローチスターン高原とより農業に適した沖積地を擁するインダス平原は、歴史的に異なった文化伝統が発達してきたと考えられる。初期ハラッパー段階前半期にみられる黒色帯土器系統と多彩文土器系統の分布の違いは、こうした文化伝統の違いを反映したものではないであろうか。

平原部に成立した地域社会が西方との交流を志向するとき、高原部とのつながりをもつことが重要となろう。初期ハラッパー段階後半期の様相はこの平原部と高原部の関係が強化されたことを示している。これによって平原部は西方との交流ルートを確保し、広域ネットワークの中で独自

のイデオロギーを創出して文明社会を生み出すにいたった可能性が高い。

しかし、高原部において活動する集団はインダス文明が成立して以降も独自の文化伝統を保持していたことをファイズ・ムハンマド式土器からクッリ式土器への展開にみて取ることができる。高原部の一部を取り込んだハラッパー文化の成立によって一時は潜在化するものの、高原部の牧畜民たちが伝統的に育んできた西方とのつながりは途絶えることがなかったのであろう。インダス文明後半期にバローチスターン高原南部に表面化したクッリ文化はまさに西方とのつながりを梃子に活躍した集団が担ったと推測される。

このように考えると、インダス文明前後の時代、すなわち銅石器時代から青銅器時代にはつねに高原部と平原部のバランスの上に地域社会のシステムが成立してきたことが推測される。単純化を恐れずにいえば、高原部に活躍した移動性の高い牧畜民と平原部に住んだ定住型農耕民の関係がこの時代を特徴づけていたのであろう。インダス文明社会とはまさにそうした両者の関係の上に成立していたと考えられる。憶測に立脚した暴論との謗りを免れ得ないであろうが、インダス文明社会が立脚した地域構造の理解に向けての叩き台として以上の推論を提起しておきたい。

おわりに

本稿ではハラッパー式土器とクッリ式土器を取り上げ、両者を同一の時間軸上に組み込むことによってインダス文明社会の変転を素描することを試みた。検討対象資料に限られることから、導き出された結論は部分的かつ仮説的であり、実態がより複雑であることは確実である。本稿で提示した仮説的枠組みをより豊富な資料の分析によって個別的に検証していくことが今後の課題である。

個々の遺物・遺構に始まり、遺跡、小地域、大地域に及ぶ諸々のレベルでの多角的検討が文明社会の多面性を理解する上で不可欠であり、かつ各レベルでの検討を有機的に関連させていくことが今後の研究の方向性を模索する上で肝要である。

また、インダス文明の歴史的評価にあたってさまざまなレベルからの議論が不可欠である。一つの遺跡から西南アジア世界にまで及ぶ諸々の地域空間の中でインダス文明の歴史的意義を論じることが求められよう。それはすなわち国境なき時代に生きた人々が築き上げた社会・文化の多面性や多様性、あるいはのちの時代へと展開する文化伝統の意義を問うことにほかならない。

本稿は2006年度日本南アジア学会におけるポスター発表、日本西アジア考古学会十周年記念連続シンポジウムで

の口頭発表、日本西アジア考古学会第12回大会での口頭発表の内容の一部をまとめたものである。共同研究に携わってきた近藤英夫先生および米山あかね氏に御礼申し上げます。また、J.M. Kenoyer、V.S. Shinde、Q. Mallahの各氏から貴重なご教示を賜ったことも銘記しておきたいと思います。最後となりましたが、査読を引き受けてくださった先生方にも御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Ajithprasad, P. 2002 The Pre-Harappan Cultures of Gujarat. In S. Settar and Ravi Korisettar (eds.), *Indian Archaeology in Retrospect Vol. II Protohistory: Archaeology of the Harappan Civilization*, 129-158. New Delhi, Indian Council of Historical Research/Manohar.
- Banerji, R.D. 1923 Explorations and Research, Mohenjo-daro. *Annual Report of Archaeological Survey*, 1922-23: 102-104.
- Besenal, R. 1992 Recent Archaeological Surveys in Pakistani Makran. In C. Jarrige (ed.), *South Asian Archaeology 1989*, 25-35. Madison, Prehistory Press.
- Besenal, R. and P. Marquis 1993 Excavations in Miri Qalat (Pakistani Makran) - Results of the First Field-Season (1990). In A.J. Gail and G.J.R. Mevissen (eds.), *South Asian Archaeology 1991*, 31-48. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Besenal, R. 1994 The 1992-1993 field-seasons at Miri Qalat: new contributions to the chronology of Protohistoric settlement in Pakistani Makran. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 81-92. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Besenal, R. 1997 The Chronology of Ancient Occupation in Makran: Results of the 1994 Season at Miri Qalat, Pakistan Makran. In R. Allchin and B. Allchin (eds.), *South Asian Archaeology 1995*, 199-216. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.
- Besenal, R. 2005 Chronology of Protohistoric Kech-Makran. In C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.), *South Asian Archaeology 2001*, 1-9. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Biscione, R. 1973 Dynamics of an Early South Asian Urbanization: The First Period of Shahr-i Sokhta and its Connections with Southern Turkmenia. In N. Hammond (ed.), *South Asian Archaeology*, 105-118. London, Duckworth.
- Biscione, R. 1990 The Elusive Phase 2 of Shahr-i Sokhta Sequence. M. Taddei (ed.), *South Asian Archaeology 1987*, 391-409. Rome, IsMEO.
- Casal, J.-M. 1961 *Fouilles de Mundigak*. Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Casal, J.-M. 1964 *Fouilles d' Amri*. Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Dales, G.F. and J.M. Kenoyer 1986 *Excavation at Mohenjo Daro, Pakistan, The Pottery*. Philadelphia, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Dales, G.F. and C.P. Lipo 1992 *Explorations of the Makran Coast, Pakistan: A Search for Paradise*. Berkeley, Archaeological Research Facility, University of California.
- Daniel, G. 1968 *The First Civilizations: The Archaeology of Their Origins*. London, Thames and Hudson.
- De Cardi, B. 1970 Excavation at Bampur, a Third Millennium Settlement in Persian Baluchistan, 1966. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 51/3: 237-355.
- Deva, K. and D.E. MacCown 1949 Further Exploration in Sind: 1938. *Ancient India* 5: 12-30.
- Durrani, F.A. 1988 Excavation in the Gomal Valley, Rehman Dheri

- Excavation Report No. 1. *Ancient Pakistan* Vol. 6: 1-232.
- Durrani, F.A., Ihsan Ali and G. Erdosy 1991 Further Excavation at Rehman Dheri. *Ancient Pakistan* 8: 61-151.
- Durrani, F.A. and R.P. Wright 1992 Excavation at Rahman Dheri: The Pottery Typology and Technology. In G.L. Possehl (ed.) *South Asian Archaeology Studies*, 145-162. New Delhi, Oxford & IBH.
- Fairservis, W.A. 1956 Excavation in the Quetta Valley, West Pakistan. *Anthropological Papers of American Museum of Natural History* 45/2: 162-402.
- Fairservis, W.A. 1959 Archaeological Survey in the Zhob and Loralai Districts, West Pakistan. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 47/2: 277-448.
- Fairservis, W.A. 1971 *The Roots of Ancient India*. New York, Macmillan.
- Francfort, H.-P. (ed.) 1989 *Fouilles de Shortughai: Recherches sur L Asie Centrale Protohistorique*. Paris, Diffusion de Boccard.
- Franke-Vogt, U., Saleem Shams ul-Haq and M.H. Khan Khattak 2000 Archaeological Exploration in the Kanrach Valley (Las Bela, Balochistan). In M. Taddei and G. de Marco (eds.) *South Asian Archaeology 1997*, 189-213. Rome, IsIAO.
- Franke-Vogt, U. 2005 Excavations at Sohr Damb/Nal: Results of the 2002 and 2004 Seasons. In U. Franke-Vogt and H.-J. Weisshaar (eds.), *South Asian Archaeology 2003*, 63-76. Aachen, Linden Soft Verlag e.K.
- Franke-Vogt, U. and A. Ibrahim 2005 A New Perspective of an Old Site: Reopening Excavations at Sohr Damb/Nal (Balochistan). In C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.), *South Asian Archaeology 2001*, 105-115. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Gadd, G.J. and S. Smith 1924 The New Links Between Indian and Babylonian Civilizations. *The Illustrated London News*, October 4 1924: 614-616.
- Gordon, D.H. 1958 *The Prehistoric Background of Indian Culuture*. Bombay, Bhulabai Memorial Institute.
- Hargreaves, H. 1929 *Excavations in Baluchistan 1925, Sampur Mound, Mastung and Sohr Damb, Nal*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 35. Calcutta, Government of India Central Publication Branch.
- Jarrige, C., J.F. Jarrige, R.H. Meadow and G. Quivron 1995 *Mehrgarh Field Reports 1974-1985 From Neolithic Times to the Indus Civilization*. Karachi, The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan in Collaboration with the French Ministry of Foreign Affairs.
- Jarrige, J.-F. 1988 Excavations at Nausharo. *Pakistan Archaeology* 23: 149-203.
- Jarrige, J.-F. 1990 Excavations at Nausharo; 1988-89. *Pakistan Archaeology* 25: 193-240.
- Jarrige, J.F. 1993 The Question of the Beginning of the Mature Harappan Civilisation as Seen from Nausharo excavations. In A. J. Gail and G. J. R. Mevissen (eds.) *South Asian Archaeology 1991*, 149-164. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Jarrige, J.F. 1994 The Final Phase of the Indus Occupation at Nausharo and Its Connection with the Following Cultural Complex of Mehrgarh VIII. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 295-313. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Jenkins, P.C. 1994 Continuity and Change in the Ceramic Sequence at Harappa. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 315-328. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Joshi, J.P. and A. Parpola 1987 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 1. Collections in India*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kamada, H. 1990 Chronological Change of Designs on the Harappan Painted Pottery in Sind. *Bulletin of Ancient Orient Museum* 11: 25-64.
- Kamada, H. 1991 Harappan Painted Pottery from Kot Diji, Pakistan. *Al-Rāfidān* Vol. 12: 171-185.
- Kamada, H. 1997 Assemblage of Harappan Pottery. *Indo-Kouko-Kenkyu* 18: 112-116.
- Khan, F.A. 1965 Excavation at Kot Diji. *Pakistan Archaeology* 2: 13-85.
- Kenoyer, J.M. 1998 *Ancient Cities of Indus Valley*. Karachi, American Institute of Pakistan Studies/Oxford.
- Kenoyer, J.M. and R.H. Meadow 2000 The Ravi Phase, A New Manifestation at Harappa. In M. Taddei and G. de Marco (eds.), *South Asian Archaeology 1997*, 55-76. Rome, IsIAO.
- Kohl, P. 1987 The Ancient Economy, Transferable Techniques and the Bronze Age World-Systems. In M. Rowlands, M. Larsen and K. Kristiansen (eds.) *Centre and Periphery in the Ancient World*, 13-24. Cambridge, Cambridge University Press.
- Lal, B.B., B.K. Thapar, J. P. Joshi and M. Bala 2003 *Excavation at Kalibangan: The Early Harappans (1961-1969)*. Memoirs of The Archaeological Survey of India No. 98. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Lamberg-Karlovsky, C.C. and M. Tosi 1973 Shahr-i Sokhta and Tepe Yahya: Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau. *East and West* 23/1-2: 21-57.
- Mackay, E.J.H. 1938 *Further Excavations at Mohenjo Daro*. Delhi, Government of India Press.
- Mackay, E.J.H. 1943 *Chanhudaro Excavations, 1935-36*. Boston, Museum of Fine Arts, Boston.
- Marshall, J. 1924 First Light on a Long-Forgotten Civilization. *The Illustrated London News*, September 20 1924: 528-832.
- Marshall, J. 1931 *Mohenjo-Daro and the Indus Civilization*. London, Arthur Probsthain.
- Meadow, R.H. (ed.) 1991 *Harappa Excavations 1986-1990: A Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*. Madison, Prehistory Press.
- Mughal, M.R. 1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (c.3000-2400B.C.)*. Ph. D. Dissertation, Philadelphia, Dept. of Archaeology, Univ. of Pennsylvania.
- Mughal, M.R. 1991 The Rise of Indus Civilization. In M. Jansen, M. Mulloy and G. Urban (eds.), *Forgotten Cities on the Indus, Early Civilization in Pakistan from the 8th to the 2nd Millennium B.C.*, 104-110. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Mughal, M.R. 1997 *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Lahore, Ferozsons.
- Piggott, S. 1950 *Prehistoric India to 1000 B.C.* London, Penguin Books.
- Possehl, G.L. 1986 *Kulli An Exploration of Ancient Civilization in Asia*. Durham, Carolina Academic Press.
- Possehl, G.L. 1990 Revolution in the Urban Revolution: The Emergence of Indus Urbanization. *Annual Review of Anthropology* 19: 261-82.
- Possehl, G.L. 1999 *Indus Age: the Beginnings*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Possehl, G.L. 2003 *The Indus Civilization: A contemporary Perspective*. New York, Altamira.
- Pracchia, S. 1985 Excavation of a Bronze-Age Ceramic Manufacturing Areas at Lal Shah, Mehrgarh. *East and West* 35/4: 458-468.
- P'yankova, L. 1994 Central Asia in the Bronze Age: Sedentary and Nomadic Cultures. *Antiquity* 68/259: 355-372.
- Quivron, G 1994 The Pottery Sequence from 2700 to 2400 BC at Nausharo,

- Baluchistan. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 629-644. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Quivron, G. 2000 The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavation at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50/1-4: 147-190.
- Sayce, A.H. 1924 Remarkable Discoveries in India. *The Illustrated London News*, September 27 1924: 566.
- Shah, S.G.M. and A. Parpola 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 2. Collections in Pakistan*. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Stein, A. 1931 *An Archaeological Tour in Gedrosia*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 43. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Suraj Bhan 1975 *Excavation at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra, Kurukshetra University.
- Tosi, M. 1969 Excavation at Shahr-i Sokhta. Preliminary Report on the Second Campaign. *East and West* 19: 283-386.
- Tosi, M. 1970 Tepe Rud-i Biyaban. *Iran* 8: 189.
- Tosi, M. 1979 The Proto-urban Cultures of Eastern Iran and the Indus Civilization. Notes and Suggestions for a Spatio-temporal Frame to Study the Early Relations between India and Iran. In M. Taddei (ed.), *South Asian Archaeology 1977*, 149-171. Rome, IsMEO.
- Vats, M.S. 1940 *Excavations at Harappa*. Delhi, Government of India Press.
- Wheeler, R.E.M. 1947 Harappa 1946: The Defences and Cemetery R37. *Ancient India* 3: 58-130.
- Wheeler, R.E.M. 1968 *The Indus Civilization*. 3rd edition. Cambridge, Cambridge University Press.
- NHK・NHK プロモーション編 2000 『世界四大文明 インダス文明展』NHK・NHK プロモーション。
- 鎌田博子 2000 「インダス文明の起源－モエンジョ・ダロ下層併行期の性格－」『考古学雑誌』85巻3号 37-58頁。
- 小泉龍人 1988 「北方インダス平原部における先ハラッパー諸文化

- の一考察」『インド考古研究』11号 1-40頁。
- 小泉龍人 1989 「インダス文明の起源をめぐる諸研究—文明形成期の概念規定—」『遡航』7号 1-16頁。
- 後藤 健 1997 「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』32号 15-144頁。
- 後藤 健 1999 「遺物の中の異物—インダス文明の遺物から」『考古学雑誌』84巻4号 70-88頁。
- 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 2006 「クッリ式土器とその意義—岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21 15-50頁。
- 宗基秀明 1999 「ラフマーン・デーリ遺跡とコート・ディジー文化」『考古学雑誌』83巻4号 20-42頁。
- 徐 朝龍 1989 「コート・ディジー式土器とソーティ式土器—その関係をめぐって—」『考古学雑誌』74巻3号 39-59頁。

【挿図出典】

- 図1 (Jarrige et al. 1995) (Khan 1965) (Lal et al. 2003) 掲載実測図をもとに筆者作成。
- 図2 (Casal 1961) (Jarrige 1988) (Jarrige 1993) (Jarrige et al. 1995) (Khan 1965) (Lal et al. 2003) (Quivron 1994) 掲載実測図をもとに筆者作成。
- 図3 (Mackay 1938) (Mackay 1943) (Marshall 1931) (Quivron 2000) 掲載実測図をもとに筆者作成。
- 図4 (Jarrige 1994) (Possehl 1986) (近藤・上杉・小茄子川 2007) 掲載実測図をもとに筆者作成。
- 図5 (Jarrige 1990) 掲載実測図を再トレース。
- 図6 (NHK・NHK プロモーション編 2000) 掲載番号 340 をもとに筆者作成。
- 図7 筆者作成。
- 表1 筆者作成。

上杉 彰紀

総合地球環境学研究所

Akinori UESUGI

Research Institute for Humanity and Nature

小茄子川 歩

東海大学大学院博士課程後期課程

Ayumu KONASUKAWA

Tokai University